

《研究ノート》

大学生の就職意識の変化*

— 一時系列調査結果を利用して —

宮 本 大

Changes for Job Placement Consideration of College Students:
Based on the results of time-series surveys
DAI MIYAMOTO

キーワード

大学生 (College student), 就職意識 (Job placement consideration), 時系列調査 (Time-series surveys)

I はじめに

大学生の就職活動において「就職氷河期」という言葉が使われたのはバブル経済崩壊後のことであり、日本経済の長期的かつ深刻な不況やグローバル市場における競争激化のあおりを受け、厳しい新卒採用動向を言い表している。そして近年も米国のサブプライム・ローン問題などの信用不安から生じた世界的な金融危機によって、やや回復傾向にあった新卒採用状況が再度悪化し、「就職氷河期」が再来している。こうした状況の中、大学生の就職意識が内向きになり、また公務員や大企業を志望するなどの安定志向が強まっているとの指摘がある¹⁾。そこで本稿では、こうした厳しい雇用環境における大学生の就職意識の現状と、近年の変化について考察する。

本稿で利用する情報は、株式会社毎日コミュニケーションズが行っている大学3年生を対象とした就職に対する意識調査の集計結果である。この調査は、1979年以来、毎年実施され、調査対象や内容が大きく変化することなく、経年的な変化を追いかけることが可能な設計となっている。しかし現在、公表されている集計結果は、一部の情報を除き、2000年3月に卒業

する者（調査時期：1998年12月）から2012年3月の卒業予定者（同：2010年10月）であるため、本稿ではこの13年分を利用する。また調査は文系・理系学生両方に対して実施されているが、本稿では焦点を絞るために文系学生のみを取り上げる。この調査では大学生の就職に関する7つの調査項目が設定されており、そのうちの「就職観」、「企業志向」、「会社選択のポイント」の3つの項目を利用して検討を行う²⁾。なお具体的な検証としては、これら3つの項目を通して、近年、大学生はどのような就職意識をもっているのかという点、また、そうした意識は近年どのように変化しているのかという点、さらにそれらが景気や就職市場状況とどのように関係しているのかという点に注目する。

本稿の構成は以下のとおりである。II節で

* この研究は平成23年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）の基盤研究（C）「持続可能な日本型人材マネジメントのあり方についての実証的研究（課題番号：23530489）」よりサポートを受けている。

1) 厚生労働省（2010）『平成22年版労働経済白書』、AERA 2010年1月18日号「ANAが首位、超安定志向で浮かぶ会社 独占・2011年卒就職人気企業ランキング」、週刊ダイヤモンド2009年2月5日号「安定志向の男子学生が急増 総合商社が苦慮する一般職志望のオトコたち」、楽天リサーチ株式会社（2009）「“人事担当者に聞く” 2010年度新卒採用に関する調査」など

2) 調査概要については巻末の付表1および2を参照。

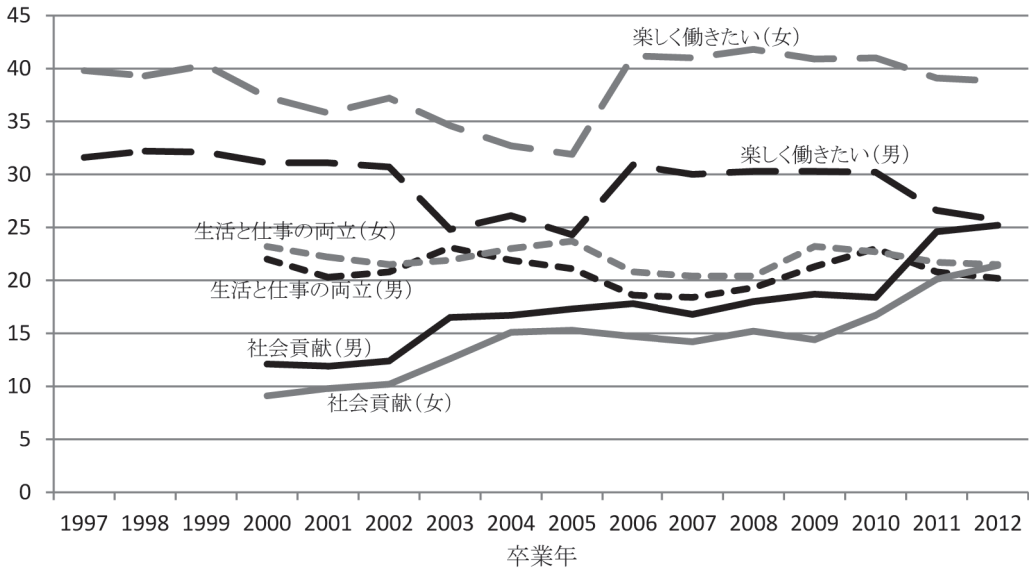


図1 就職観の推移：男女別 (%)

は、3つの視点の様相と、その時系列的な変化を考察する。Ⅲ節では、3つの視点間の関係について、さらにⅣ節では、景気や就活市場の状況が及ぼす影響について考察する。そして最後に、今後の研究の展望を述べ結語とする。

Ⅱ 就職意識の変化：就職観，企業志向，会社選択のポイント

2-1. 就職観

調査では、「楽しく働きたい」、「個人の生活と仕事を両立させたい」、「プライドの持てる仕事をしたい」、「自分の夢のために働きたい」、「人のためになる仕事をしたい」、「社会に貢献したい」、「出世したい」、「収入さえあればよい」の8つの選択肢から就職観として最もあてはまるものを1つ選ぶことになっている。ここでは回答割合の大きい「楽しく働きたい」、「個人の生活と仕事を両立させたい（以下、「生活と仕事の両立」）、「社会貢献（人のためになる仕事をしたい+社会に貢献したい）」という3つ就職観を取り上げて検討する（図1参照³⁾）。なお利用しない項目について、2012年3月卒業予定の男子学生において「プライドの持てる仕

事をしたい」は11.6%（女子学生：61%）、「自分の夢のために働きたい」は13.0%（同：10.4%）、「出世したい」は2.1%（同：0.5%）、そして「収入さえあればよい」は2.3%（同：1.3%）という回答割合であった。

では、3つの就職観の推移をみると、男女ともに「楽しく働きたい」の回答割合が最も高く、2000年代前半に低下したものの、おおむね女子学生は30～40%、男子学生は25～30%の割合で推移している。また一貫して、女子学生のほうが男子学生よりも「楽しく働きたい」と考える傾向が強い。また「生活と仕事の両立」について、多少の上下動はあるもののこの十数年大きな変化はなく20%前後で推移してきた。また「楽しく働きたい」のように男女間で大きな差は見られない。次に「社会貢献」の推移について、2000年は男女それぞれ12.1%、9.1%の割合であったが、2012年には25.2、21.4%と倍以上に増加し、近年、社会に貢献することを意識しながら就職を考える大学生が増加しているこ

3) 横軸の単位は卒業年であり、当該年の3月に卒業するものの回答を示している。以降の同様の図では、特に断りのない限り、横軸の単位は図1と同じ扱いとなっている。

表1 就職観の相関関係

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
(1) 楽しく働きたい (男)	1					
(2) 生活と仕事の両立 (男)	-0.468	1				
(3) 社会貢献 (男)	-0.762 **	0.225	1			
(4) 楽しく働きたい (女)	0.877 **	-0.295	-0.596 *	1		
(5) 生活と仕事の両立 (女)	-0.427	0.894 **	0.210	-0.318	1	
(6) 社会貢献 (女)	-0.819 **	0.396	0.832 **	-0.717 **	0.431	1

注) 相関係数はすべて偏相関係数で制御変数はトレンド (年)。
 有意水準について, **は1%, *は5%である。

とが確認できる⁴⁾。

では、これら3つの就職観の間には、どのような関係があるのだろうか。この点を見るために、各項目間の相関係数を計測した(表1参照⁵⁾)。まず男女間では「楽しく働きたい」、「生活と仕事の両立」、「社会貢献」のいずれも0.8を超える高い正の相関関係が示された。このことから、この十数年における就職観の推移は男女間で大きく異なることはなく、同じように変化してきたことが示唆される。次に、男女別に各項目間の関係をみると、男女ともに「楽しく働きたい」と「社会貢献」の間には0.7を超える負の相関関係が存在し、この十数年における「社会貢献」という就職観の増加は「楽しく働きたい」というやや自己満足的な閉じた就職観との代替的な変化を伴って生じていることが見て取れる。「生活と仕事の両立」は他の就職観との関係は見いだせなかった。

2-2. 企業志向

次に企業志向についてみていこう。ここでの企業志向とは、就職する際の企業の規模に関する好みのことであり、「ゼットイに大手企業が

よい」、「自分のやりたい仕事ができるのであれば大手企業がよい」、「ヤリガイのある仕事であれば中堅・中小企業でもよい」、「中堅・中小企業がよい」、「自分で会社を起こしたい」、「その他(公務員、Uターン志望など)」の6つの選択肢の中から最もあてはまるものを1つ選ぶ設問によって把握されている。この回答結果を利用して、「大手志向(ゼットイに大手企業がよい+自分のやりたい仕事ができるのであれば大手企業がよい)」と「中小志向(ヤリガイのある仕事であれば中堅・中小企業でもよい+中堅・中小企業がよい)」という指標を作成した(図2参照)。なお「自分で会社を起こしたい」は0.2~2.9%、「その他」は3.8~8.1%で推移し、それらの比率は相対的に低いものであった。

まず男子学生の大手志向の回答割合は、バブル経済の崩壊後、1993年の70%弱から1997年の約40%へと大きく低下し、その後、徐々に回復するものの、近年2008年をピークに再度低下傾向が見受けられる。こうした傾向は2000年前後を除けば男女間でほぼ共通し、当然ながら中小志向は男女ともに大手志向とほぼ反対の動きを示している。また男子学生は2000年前後に大手志向と中小志向がほぼ同レベルになって以降、2000年代は大手志向が中小志向を上回ってきたが、2012年3月卒業予定者は中小志向が若干上回る状態となる。また女子学生に至っては中小志向が大きく大手志向を上回り、近年、男女とも大学生の中小企業への関心が高まっている。

4) 2011年3月11日に発生した東日本大震災以降に行われた大学生の就業に対する意識調査において地元・復興への貢献意識の高まりが顕著であることは、近年、こうした若者の社会貢献意識の高まりが関係しているものと考えられる。

5) 表の数値はすべてトレンド(年)を制御変数とする偏相関係数である。また、以降同様の表においても、特に断りのない限り、トレンドを制御変数とする偏相関係数が示されている。

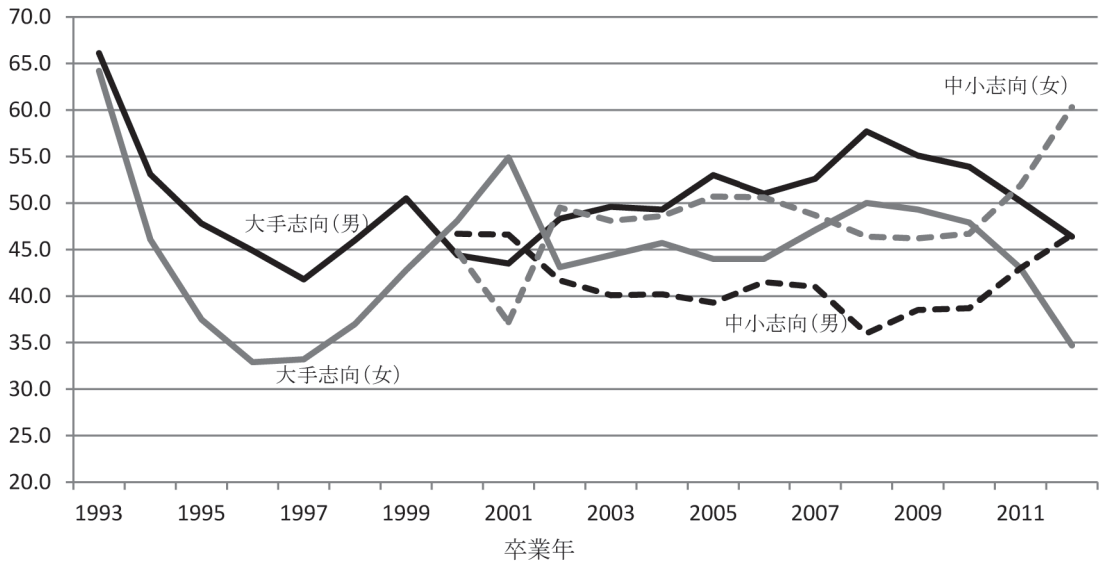


図2 企業志向の推移・男女別 (%)

2-3. 会社選択のポイント

次に、会社選択のポイントについてみていこう。会社選択のポイントとは、学生が会社を選ぶ際に重視する点を、後述する20項目の選択肢の中からあてはまるものを2つ選ぶというものであり、選択肢は仕事内容から会社の印象など多岐に渡る。本稿では、20項目を、ある程度共通する特徴で括りなおし、次の①～⑥の項目を利用して会社選択のポイントを検討する。

①仕事内容重視：

「自分のやりたい仕事（職種）ができる会社」
「働きがいのある会社」

「自分の能力・専門を活かせる会社」
「志望業種の会社」

②評価処遇重視：

「勤務制度、住宅など福利厚生の良い会社」
「給料のよい会社」

③働き方重視：

「休日、休暇の多い会社」
「転動のない会社」

④会社の印象重視：

「社風が良い会社」
「親しみのある会社」
「有名な会社」

⑤安定性：

「安定している会社」
「一生続けられる会社」

⑥成長性

「これから伸びそうな会社」

また、上記6つの項目に入らなかったものとしては、「事業を多角化している会社（2012年3月卒業予定者の男子学生：1.3%、女子学生：0.5%）」、「海外で活躍できそうな会社（同、7.7、7.2%）」、「大学・男女差別のない会社（同、2.1、5.0%）⁶⁾」、「研修制度のしっかりしている会社（同、2.8、3.5%）」、「いろいろな職種を経験できる会社（同、4.6、3.1%）」、そして「若手が活躍できる会社（同、3.4、1.8%）」がある。以下では、男女別に分けて考察していこう。

2-3-1. 男子学生

男子学生が就職する企業を選択する際に最も重視する点は「仕事内容」である（図3参照）。

6) この差別のない会社という項目は、特に女子学生では2000年には10%を超える高い水準であり、差別の対象となっていることが影響していたものと思われる。しかし男女の雇用機会均等は依然として不十分ではあるものの、この十数年は一貫して減少トレンドにあり、現在では5%にまで低下している。

2000年代半ばまでは約90%が、また近年でも70-80%が選択し、そのほかの項目に大きな差をつけている。やはり、どのような仕事をするのか、自分の能力が（仕事に）どのように活かせるのか、という点は、いつの時代でも会社（仕事）選びにおいて重大な関心事である。しかし、近年、仕事内容以外の項目が相対的に重視される傾向が強まっている。では近年どのような項目が重視されるようになってきているのであろうか。図3において、2000年代前半と比べ、明らかに選択割合が高まっている項目は「評価処遇」、「会社の印象」、そして「安定性」である。ただし、これら3項目は、いずれもこ

こ数年に選択割合が低下し、今後の動向に注目が必要である。その他では「成長性」は2012年にやや回復したが、2000年代前半と比べると、後半は低下傾向にあり、また「働き方」は多少の上下動はあるものの、10%弱で相対的に安定した推移を示している。

次に、各項目間の関係についてみてみよう。ここではトレンド（年）を制御変数とする偏相関係数を計測し、その関係を検討する（表2参照）。まず重要性が高いと男子学生に最も支持された「仕事内容」は、「評価処遇」、「働き方」、そして「安定性」との間に負の相関関係が存在する。つまり、男子学生は「仕事内容」

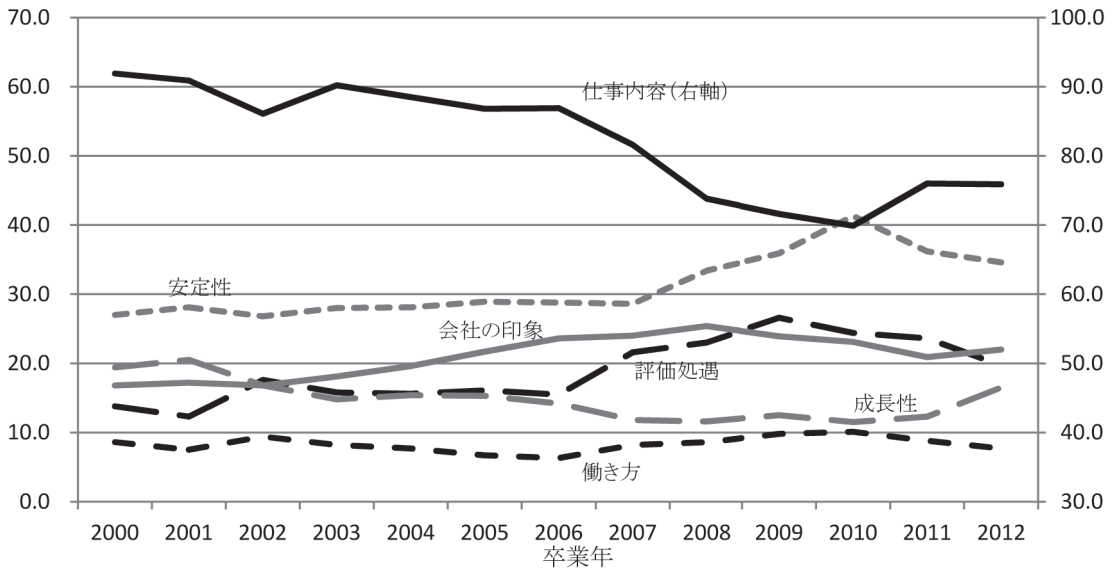


図3 会社選択のポイント：男子学生（%）

表2 会社選びの各ポイント間の相関関係：男子学生

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
(1) 仕事内容	1					
(2) 評価処遇	-0.838 **	1				
(3) 会社の印象	-0.202	0.283	1			
(4) 働き方	-0.821 **	0.826 **	-0.251	1		
(5) 安定性	-0.693 *	0.426	-0.177	0.668 *	1	
(6) 成長性	0.320	-0.613 *	-0.594 *	-0.253	-0.032	1

注) 相関関係はすべて偏相関係数で制御変数はトレンド（年）。
有意水準について、**は1%、*は5%である。

よりも給料がよく、勤務制度が整備されている、休日が多く、転勤が少ない、もしくは安定している会社であることを重視する傾向を強めている。また「働き方」は、「評価処遇」と「安定性」との間に正の相関があり、男子学生は、休日が多く、転勤は少ないといった「働き方」、給料がよく、勤務制度が整備されているといった「評価処遇」を会社の安定性と関連する項目として考えて、会社を選ぼうとしている。つまり、近年の仕事内容の重要性の低下は大学生の就職に対する安定志向の強まりの影響を受けていることが示唆される。さらに「成長性」は「評価処遇」と「会社の印象」との間に負の相関があり、成長している会社を選ぶ男子学生は、会社の印象や評価処遇を気にしない傾向がみられた。

2-3-2. 女子学生

就職する企業を選択する際、女子学生は男子学生よりも「会社の印象」を重視する傾向が強いが、最も重視する項目はやはり「仕事内容」であり、2000年代前半期は約90%が、また後半期でも70-80%弱の学生が重視していると回答している(図4参照)。また各項目の推移は「仕

事内容」が近年低下傾向にある一方で「安定性」や「評価処遇」などの項目が過去に比して高まっていることなど男子学生と大きく変わることはない。

男子同様に各項目間の関係をみると、「仕事内容」は「働き方」と統計的に有意な相関関係は存在しなかったが、「評価処遇」や「安定性」とは負の相関が検出された(表3参照)。この点は近年の「仕事内容」選択割合の低下と併せて、「仕事内容」よりもまずは「安定性」を求める男子学生とほぼ同じである。また、「成長性」は、「会社の印象」と負の相関をもっていた。

Ⅲ 就職観、企業志向、会社選択のポイントの関係

今節では、就職観、企業志向、会社選択のポイントの間にどのような関係があるのだろうか。一般的に、学生の就職意識は、まずその意識を方向付ける就職観があり、その就職観に基づき、企業志向や会社選択のポイントがあると考えられる。さらに本稿では、企業志向があり、会社選択のポイントに影響を及ぼすとい

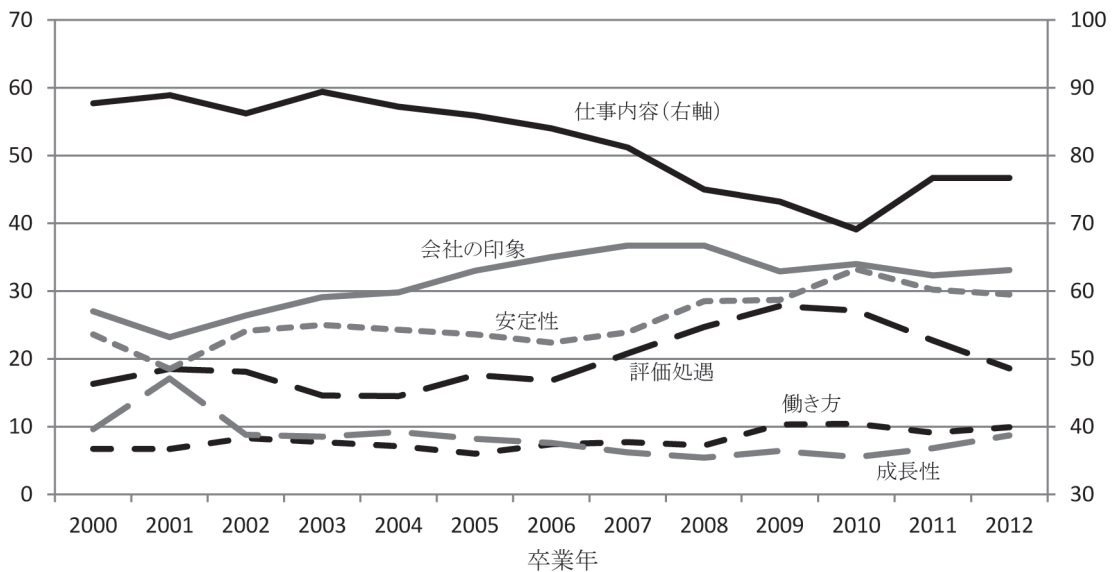


図4 会社選択のポイント：女子学生 (%)

表3 会社選びの各ポイント間の相関関係：女子学生

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
(1) 仕事内容	1					
(2) 評価処遇	-0.898 **	1				
(3) 会社の印象	-0.340	-0.006	1			
(4) 働き方	-0.448	0.255	-0.555	1		
(5) 安定性	-0.591 *	0.357	-0.156	0.505	1	
(6) 成長性	0.275	-0.143	-0.700 *	0.037	-0.477	1

注) 相関関係はすべて偏相関係数で制御変数はトレンド(年)。
有意水準について、**は1%、*は5%である。

表4 就職観、企業志向、会社選択のポイントの相関関係

	男子学生				女子学生			
	(1)	(2)	(3)	(4)	(1)	(2)	(3)	(4)
大手志向	0.137	-0.065	-0.499 +	1	0.418	0.034	-0.633 *	1
仕事内容	-0.632 *	-0.279	0.754 **	-0.473	-0.446	-0.177	0.651 *	-0.647 *
評価処遇	0.476	0.262	-0.512	0.599 *	0.368	0.174	-0.784 **	0.806 **
会社の印象	0.375	-0.710 *	-0.199	0.763 **	0.262	-0.345	-0.114	0.100
働き方	0.385	0.516	-0.518	0.168	0.285	0.218	-0.605 *	0.005
安定性	0.339	0.653 *	-0.504	0.084	0.036	0.346	-0.240	0.028
成長性	-0.013	-0.084	-0.085	-0.865 **	-0.308	0.088	0.386	0.087

注) (1)~(4)は次の通り。(1)楽しく働きたい、(2)生活と仕事の両立、(3)社会貢献、(4)大手志向
数値はいずれも偏相関係数であり、(1)~(3)の制御変数はトレンド(年)、(4)はトレンドと就職観である。
統計的有意水準について、**は1%、*は5%である。

う、就職観→企業志向→会社選択のポイントという思考の流れを想定して、3つの観点の間の関係を検討する。これまで同様に相関係数を計測した(表4参照)。

まず就職観と企業志向との間には、男女とも「社会貢献」と「大手志向」との間に負の相関関係が存在し、社会貢献という就職観をもつ学生では大企業に入りたいという考えを持つ人が少なくなる。次に「楽しく働きたい」という就職観をもつ男子学生では「仕事内容」と負の相関関係があり、楽しく働けるのであれば、やりたい仕事や能力が活かせる仕事に就きたいと考える学生が減少する。女子学生では、「楽しく働きたい」という就職観は企業志向や会社選択のポイントに対して特に影響を及ぼしていない。また「生活と仕事の両立」という就職観をもつ男子学生では「会社の印象」に対して負の

相関があり、有名である会社や親しみのある会社であることを重視する学生が減少する傾向がみられる一方、「安定性」を重視する学生が多くなる。この「生活と仕事の両立」については「楽しく働きたい」と同様に女子学生では企業志向や会社選択のポイントに対する影響は見られない。最後に「社会貢献」という就職観をもつ学生では男女ともに「仕事内容」と正の相関関係が存在し、仕事の内容を重視する学生が増える。このことは仕事内容が自分のやりたい仕事、つまり社会に貢献できる、人の役に立つ仕事なのか、という点にこだわりがでているためと考えられる。また女子学生では「評価処遇」や「働き方」と負の相関関係があり、「社会貢献」という就職観をもつ女子学生では、給料の良さや勤務制度の整備、休日の多さ、転勤の少なさを重視する人が減少する傾向がある。

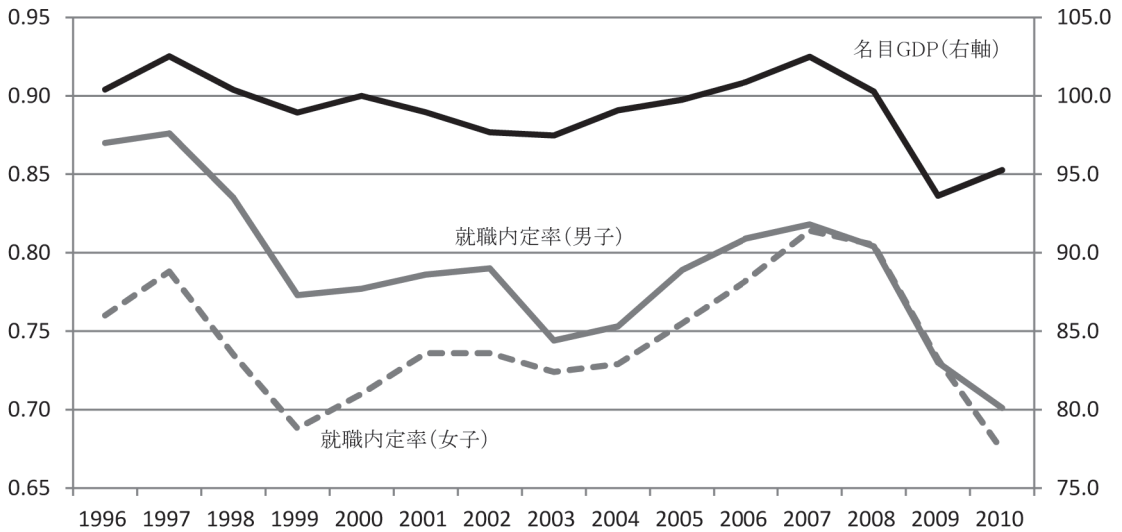


図5 景気と就職市場の動向

IV 大学生の就職意識に影響を及ぼす要因： 景気状況、前年の就活状況

ここでは景気や就職市場の状況が大学生の就職観と企業志向に及ぼす影響を検討する。変数について、景気の状態は名目GDPを、就職市場の状況は有効求人倍率と就職内定率を利用する⁷⁾。そのうち、名目GDPと新卒就職市場の指標でもある就職内定率の動向をみておこう(図5参照)。

まず名目GDPの推移をみると、バブル経済崩壊後、1997年までやや回復したものの、その後、2003年の底を打つまでGDPの減少が続き、再度、回復するが2008年の金融危機後、名目GDPは大きく落ち込むこととなる。また大卒予定者の就職内定率は男女ともに名目GDPが減少すれば低下し、増加すれば上昇するなど連動した推移が確認できる。ただし女子学生が2007年にほぼ1997年の内定率の水準に回復した

にもかかわらず、男子学生の2007年の内定率は1997年の水準まで回復しないなど、GDPの回復がそのまま内定率の回復につながらない様子が伺える。そして2010年は男女ともに就職内定率が過去15年間で最低を記録するなど現在の就職状況の厳しさが見て取れる。

一般的に、こうした景気動向や就職市場状況は学生の就職観や企業志向に影響を及ぼすものと考えられることから、以下では、その相関関係は景気状況→就職観・企業志向という方向への影響を示すと仮定し議論する。各相関関係は表5に示した。

まず男女ともに「楽しく働きたい」という就職観は景気や就職市場の状況と概ね正の相関が確認できる一方、「社会貢献」という就職観は負の相関関係が存在する。また「生活と仕事の両立」とは関係がみられず、この就職観は景気や就職市場の状況とは別の要因によって規定されていると考えられる。さらに、企業志向との関係をみると、男子学生では大手志向とは正の相関関係が検出されたが、女子学生では大手志向との関係は見いだせなかった。これら一連の結果から基本的に男女ともに景気が悪くなり、就職市場も厳しくなると、「楽しく働きたい」と考える学生が減少し、その代わりに「社会貢

7) 名目GDPは2000年を100とする指数で、内閣府「国民経済計算」、有効求人倍率は年平均で、厚生労働省「職業安定業務統計」、そして就職内定率は男女別で毎年12月1日現在の数値を厚生労働省「大学等卒業予定者の就職内定状況調査」より利用している。

表5 就職状況および景気との関係

	男子				女子			
	(1)	(2)	(3)	(4)	(1)	(2)	(3)	(4)
有効求人倍率	0.505 +	-0.435	-0.685 *	0.817 **	0.557 +	-0.306	-0.680 *	0.131
就職内定率	0.518 +	0.245	-0.657 *	0.669 *	0.389	0.201	-0.669 *	0.356
名目GDP	0.636 *	-0.021	-0.826 **	0.595 +	0.625 *	-0.034	-0.874 **	-0.036

注) (1)~(4)は次の通り, (1)楽しく働きたい, (2)生活と仕事の両立, (3)社会貢献, (4)大手志向
 数値はいずれも偏相関係数であり, (1)~(3)の制御変数はトレンド(年), (4)はトレンドと就職観である。
 統計的有意水準について, **は1%, *は5%, +は10%である。

献」を考える学生が増加するという就職観の変化が生じる。近年の金融危機以降の景気後退とそれに伴う就職氷河期の再来と言われる就職市場の厳しさは、こうした就職観の変化を加速させ、「社会貢献」という就職観をもつ学生を増加させていると考えられる。また、この検証からは男子学生は不況や就職氷河期のもとでは大手志向をもつ学生が減少し、冒頭に述べたような近年、学生の大企業志望が増加しているという議論とは対照的な結果である。ただし女子学生の大手志向は景気や就職市場から影響を受けていないようである。最後に、もう一つ特徴を挙げよう。就職観や企業志向はともに景気や就職市場の状況と関係し、影響を受けるという点は同じだが、その影響を受ける度合いが異なることが示唆される。より具体的に、相関係数の大きさおよびその統計的有意性の強さという意味合いにおいて、就職観は就職市場の状況よりも景気との間の関係が強く表れる一方、大手志向は就職市場の状況とより強くリンクする傾向がみられた。

ここまでの議論とⅢ節で考察した表4の結果と併せて、景気や就職市場の状況と3つの就職意識との関係をまとめると図6-1, 2のようになる。まず男子学生は、景気や就職市場の状況が悪化した場合、「楽しく働きたい」の減少や「社会貢献」の増加という就職観の変化を通じて、「仕事内容」を重視する傾向が強まるよう、それぞれ影響を及ぼす。また「社会貢献」の増加を通じて「大手志向」の減少を促し、「成長性」重視の増加、「評価処遇」や「働き方」重視の減少という影響を及ぼす。また景気・就

職市場動向の影響とは別に、「生活と仕事の両立」という近年のワークライフバランスに対する意識の変化も男子学生の就職意識に影響を及ぼしていることが示唆される。一方、女子学生は景気や就職市場の状況が就職観に及ぼす影響は同じだが、就職観が、大手志向や会社選択のポイントへ影響を及ぼす経路は「社会貢献」の変化を通じてのみであり、その広がりも「仕事内容」「評価処遇」「働き方」の3つの項目に留まる。このように、男子学生のほうが相対的に会社選択のポイントの広い範囲へ影響が及び、かつその経路も多様であることが見て取れる。最後に、注目しておきたい点として、男女ともに「大手志向」の変化は「安定志向」とリンクしていないという点である。つまり2000年代の学生は「安定性」を大手企業に就職することと結び付けているわけではないことを示唆する。

V 今後の研究展望

本稿は、民間企業の実施した大学生の就職に対する意識調査を利用して2000年代以降の文系大学生の就職意識の概要と、その変化を考察してきた。原初的な相関分析に基づく検証ではあるが、本稿で得られた特徴的な知見に基づき、今後の研究への展望を述べて結語とする。

まず本稿は、集計された13年分の時系列データを元に考察を行っており、サンプルサイズが小さいという制約がある。それゆえ、様々な属性をコントロールして各項目の関係を分析することが困難であった。たとえば、本稿では、就職観が学生の就職意識を方向付ける大元とし、

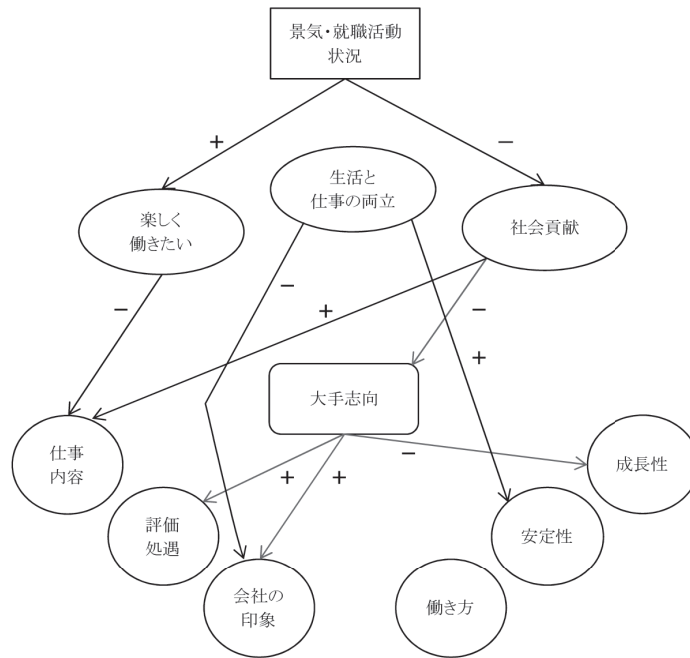


図6-1 景気と就職市場の動向：男子学生

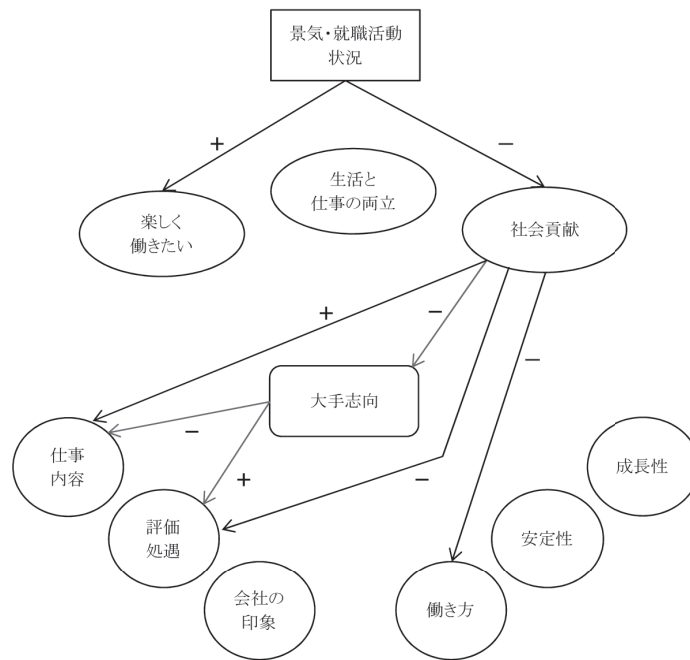


図6-2 景気と就職市場の動向：女子学生

企業志向→会社選択のポイントという思考の流れを想定して考察しているが、実際には、選択のポイント→大手志向という流れ、さらには選択のポイントと大手志向の並列ということも当然考えられる。また、いくつか明らかになった関係として、景気や就職状況が悪化した場合、「楽しく働きたい」という就職観をもつ学生が減少し、近年の就職観の変化の背景には、こうした影響が関係していることが示唆されるが、その変化の矛先は「社会貢献」であった。しかし、なぜ景気悪化が「社会貢献」という就職観の増加につながったのであろうか。また、最近の新聞や雑誌、そしていくつかの意識調査において、学生の大手志向や安定志向が強まっていることが指摘されているが、本稿の考察では景気や就職市場の悪化の影響から大手志向は減少

に転じ、また安定志向はここ数年低下傾向にある。本稿の検証結果をみる限り、こうした大手志向と安定志向はリンクしているわけではなく、大手志向＝安定志向ではないことが示唆される。特に本稿では近年の学生の安定志向が何に依存しているのかについては十分に検討できなかった。

以上の議論より、こうした就職意識の関係性をより精緻にとらえるためには個票データにアクセスし、大規模サンプルのもとで分析することが肝要である。こうした大学生の就職意識の状況やその変化を明らかにすることができれば、近年生じていると言われる新卒就職市場におけるミスマッチの解消にも役立つであろう。今後の研究の課題としたい。

付表1 調査概要

卒業対象	調査期間	有効回答数	文理内訳 (内数：男子学生)	
2000年3月	98.12～99.02	17,446	文系：11,497 (7,893)	理系：5,949 (4,062)
2001年3月	99.12～00.02	8,801	文系：6,341 (3,369)	理系：2,460 (1,621)
2002年3月	00.12～01.03	6,343	文系：4,525 (1,973)	理系：1,818 (1,149)
2003年3月	01.11～02.01	7,086	文系：4,996 (2,120)	理系：2,090 (1,406)
2004年3月	02.11～03.01	7,912	文系：5,893 (2,135)	理系：2,019 (1,309)
2005年3月	03.10～04.02	7,847	文系：5,838 (1,865)	理系：2,009 (1,207)
2006年3月	04.10～05.02	9,220	文系：6,728 (2,184)	理系：2,492 (1,469)
2007年3月	05.10～06.02	9,896	文系：7,085 (2,477)	理系：2,811 (1,671)
2008年3月	06.10～07.02	8,880	文系：6,203 (2,014)	理系：2,677 (1,541)
2009年3月	07.10～08.02	10,299	文系：7,039 (2,505)	理系：3,260 (1,968)
2010年3月	08.10～09.01	15,288	文系：10,228 (3,724)	理系：5,060 (3,236)
2011年3月	09.10～10.02	14,825	文系：10,846 (3,549)	理系：3,979 (2,592)
2012年3月	10.10～10.12	10,758	文系：6,963 (2,322)	理系：3,805 (2,340)

注) 2000, 01年3月のみ有効回答率あり、それぞれ6.1, 2.4%。
 2002年3月卒業以降は、インターネットによるアンケート実施分も含む。
 2003年3月卒業以降は、大学院1年を含む。

付表2 調査項目および内容

調査項目	設問内容
① 就職観	あなたの「就職観」に最も近いものをお選びください (択一回答)
② 企業志向	あなたは「大手企業指向」ですか、それとも「中堅企業指向」ですか (択一回答)
③ 会社選択のポイント	会社選択をする場合、どのような会社が良いと思いますか (複数回答)
④ 行きたくない会社	行きたくない会社があるとしたら、次のどのような会社ですか (複数回答)
⑤ 就職希望度	卒業しても就職しない若者が増えているといわれます。あなたの就職希望度はA (なにがなんでも就職したい)、B (希望する就職先に決まらなければ、就職しなくともよい)のどちらに近いですか (択一回答) B回答者のみ、就職しなかった場合の進路を「進学」「就職留年」「フリーター」「起業」から別途選択 (択一回答)
⑥ 志望業種	現在魅力を感じている業種は何ですか (複数回答)
⑦ 志望職種	現時点での志望職種は何ですか (択一回答)